

特 252

3

432

7

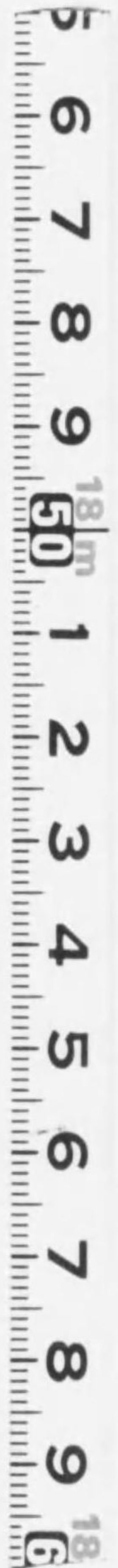
上角五郎氏述

金玉均君に就て

× 複写

原本を出納する
(複写は別室にて
全冊マイクロフィルムから)

中央朝鮮協會



始



特252
432

はしがき

朝鮮の志士金玉均氏が四十四歳の壯齡を以て上海の客舎に斃れてより本年は四十四
回忌に當り、去る三月本郷の眞淨寺に於て有志に依り盛大なる追弔法會が營まれた。
依て本會は其の法會に因み四月二十三日懇話會を催し、故人と因縁淺からぬ井上角
五郎氏に乞ひ、故人に關する述懐談を聽聞した。井上氏の懷舊一席話は之を活字に
現はしても、尙且つ滋味津津々として親しく其の馨咳に聞くの思ひあるであらう。

昭和十二年五月



中央朝鮮協會

金玉均君に就て

井上角五郎氏述

先達つて駒込の眞淨寺に於きまして金玉均君の四十四回の法事を営みました時に、私が金玉均君の事に就て一言致したことがあります。それで其の事に關しまして中島君から、此處に来て何か話をしろといふ御手紙を戴きました。最早私は年も取りましたし、又記憶とても薄くなりまして、殊に朝鮮の事などに付きまして、私が最初に参りましたのは明治十五年でありまして、其の當時に於きましては朝鮮といふ所は大變珍しかつたのでありますけれども、今日では一向珍しくもありません。従ひまして、私から特に申上げる程の材料もありません。又従つて御參考になるやうな事は申上げられまいと存じますけれども、併しながら友人の生前の事を申上げるといふこ

とは友誼上非常に心持の良いことでありまして、今日は唯金玉均なる者が、尋常一様の人でなかつたといふ事だけ申上げて置きたいと思ひます。

○

金玉均君は其の號を右筠と申して居りました。嘗て朝鮮の政治の改革を企て、失敗して日本に逃げて参りましたが、其の日本に逃げて参りました時には岩田周作といふ名を用ひて居りました。此の岩田周作君が恰度明治二十七年の三月二十八日に、上海に於て刺客の爲に殺されました。其の時に従者も連れて居りながら自分で岩田三和四十年と宿帳に書いて居りますが、私は此の岩田三和といふ名を用ひたことに付て非常に感慨の深いものがあります。そこで今何故に此の金玉均君が三和と稱して、之を自分の號として居つたかといふ事に付て申上げて見たいと思ふのであります。

偕て話は洵に古うございますが、私は郷里を出て福澤先生を頼つて参りました。先生から慶應義塾に通へと言はれまして、先生の食客となつて慶應義塾に入りました

が、此の頃に福澤先生は新聞でも、演説でも、或は人と話をする時にでも、どうしたならば日本の國の獨立が出来やうか、日本といふ國が何時までも日本といふ名を存して立行くにはどうすれば宜いかと、恰も口癖の様に日本の國の獨立の事に付て唱へられたものであります。福澤先生の友達の後藤象二郎さん——後藤さんは後に伯爵になりましたが、此の後藤さんも亦福澤先生と同じやうに、どうしたら此の國が獨立し得るであらうかといふ事に付て頻りに唱へて居りました。さういふ關係で福澤先生と後藤さんとは大變仲が良くなりました。私は此の後藤さんの秘書役といふことになつたのであります。それで私は其の慶應義塾に通ひ、傍ら後藤象二郎さんの秘書役として時々後藤さんの所に行つて居つたのであります。そして此の後藤さんと福澤先生とは一週間に二度或は三度、場合に依りますと毎日の如く出會つて、夜を耽かして語り合ふ事柄は、どうしたならば日本の國が獨立出来るであらうかといふやうな問題であります。今日諸君はどうしたならば日本が獨立出来るやうかといふことを心配して居る

と言へば不思議なやうに御考へになるでありませうが、其の當時はさういふことが眞面目に論ぜられてゐたのであります。それで其の頃は福澤先生も非常に熱心な獨立論者でありましたが、後藤さんも亦洵に熱心なる獨立論者でありました。其の他福澤先生や後藤さんの友達には寺島といふやうな人があり、或は副島さん、大隈さん、伊藤さん、井上さんといふやうな人がありましたが、是等の人々は皆日本はどうしたら獨立が出来やうかといふことを、毎日のやうに寄つて相談して居つたのであります。それで私は福澤先生の食客となり、後藤さんの祕書役となりましてから丸二年間ばかりは、福澤先生、或は後藤さん等から左様な話を漏れ聞きまして、あゝ日本といふ國はそんなに危いのかなと考へながら勤めて居つたのであります。

其の頃揃ひの白衣を着けた僧侶が三人福澤先生の家を訪ねて來ました。是が明治十四年の年末であります。此の三人の白衣の僧侶は、後で一人が金玉均、一人が徐光範それから今一人が京都本願寺の朝鮮派出布教師であつたといふことが分りましたが、

福澤先生は早速此の三人の僧侶を引入れまして、正面には福澤、後藤の兩先生が座しそれに向つて金玉均、徐光範、布教師の三人が座を占めました。それで其の初めの會合の時には先づ布教師の方から朝鮮の現在はどういふ有様であるかといふことを日本語で話しました。そして又其の時に布教師が金玉均君を福澤先生に紹介を致しました。曰く「此の金君は朝鮮では兩班中の系統、高い門地に生れ、學は陽明を修め、禪學に志し、進んで文明開化の主義を唱へ、朴泳孝、洪英植、徐光範の同氣相求むるの仲間なれども、現在は李熹王殿下の統治にして、政權は戚族閔家の手に握られ、大小の兩班は互に之に附和雷同して、事大を主義とし、支那の執權李鴻章の意を迎へて専ら支那に屈從するのであります。別に大院君李昰應とて王の生父あり、夙に鎖國主義を唱へて、兩班中の不平なるもの、平民中の負商祿商を糾合して閔氏に對抗するのであります。然るに金君が辱くも王命を受けて福澤先生を訪問することゝなりました」と述べて尙ほ「金君は斯く事大黨、鎖國黨の間に挟まれて頭角を顯し得なかつたが、國王

殿下には蓋し王族戚族の絶えざる軋轢に耐へ兼ね給ひけん、特に金君に外衙門の協辦を命じ給ひ、密に内命して、日本の福澤先生に往いて文明開化の意見を聞いて來れと申し付けられたのであります。然るに此の事が外間に洩れて、事大黨も鎖國黨も大いに警戒し、危険であるから山間の寺院に隠れ、斯く難髪して遁れて此の布教師に誘はれた次第であります。」斯様に申しまして、其の布教師は金玉均を福澤先生に紹介したのであります。

私は其の當時福澤先生の家に行りましたから、當時の事情はよく知つて居ります。福澤先生は布教師から其の金君紹介の言葉を聞き終りますると、先づ布教師の退座を促して、自ら筆を取つて、日本及び歐米各國の現状を漢文で以て書いて金君に示されました。之を見ました金玉均君は、今朝鮮は獨立國だと言つて居りますけれども、支那が内治外交の事に干渉をして、支那の屬國にしようとして居ります。先んずれば人を制すとか申しますから、茲で完全に獨立の出來る戦争を起したら如何であらうかと

思ひますがと、福澤先生に向つて申しました。所が其の時に福澤先生は——勿論言葉はこんな言葉でなく、皆漢文で書かれたものであります——いや、それは間違ひである、それは待つた方が宜い、今は其の時機ではない。それよりも人民に生活の安定を與へて、教育を普及して、以て靜に國力の伸展するのを待つが宜からう、さうすれば求めずして獨立は得られるであらう。斯ういふ風なことを書いて金君に示されました。それから東洋の運命は朝鮮、支那、日本の此の三國が連絡し、提携するのでなければ、遂に歐米の壓服する所となるを免れぬであらうといふことを書き示されて、此の三國連絡といふものに非常に力を籠められましたので、金君は大變に喜びまして、實に三和だ、今や三和といふことでなければならぬといふことを申して其の日は別れたのであります。是は何れもお互に斯ういふ言葉を交したものでなく、福澤先生と金玉均君との漢文の應答であつたのであります。

それから明治十四年の末から十五年に掛けて金玉均君は東京に滞在して居りましたが、其の中に明治十五年の七月に大院君の亂と稱しまして、日本の公使館は焼かれ、又日本から軍隊の教師に雇はれて行つた人が殺され、其の他在留して居た日本人が多数殺されたのであります。そこで應て日本と朝鮮との談判が始まつた。所が其の談判に先んじて、支那は澤山の兵を京城に送り、遂に大院君を捕へて支那に連れて行きました。さうして其の後再び元の閔氏に政權を讓つて内治外交を勝手次第にやりました。さういふやうな事で、日本の花房公使が仁川まで遁れて、談判があるといふので京城に入らうとしても京城に入れない。そこで中々談判も始まらないといふ始末であります。其の時に金玉均はどつちにも奔走して仲に立ちまして、一生懸命に朝鮮と日本との間の斡旋に奔走したのであります。此の金玉均の奔走の事に付ては朝鮮政府でも非常に喜ばれ、殊に朝鮮の國王は、内命を下して福澤先生を訪はした位でありますから大變に喜ばれた譯であります。日本の政府に於きましては井上外務卿、伊藤宮内卿の

如きは金玉均を近付けて色々と言を聽いて、大變に金玉均を信用したのであります。さうして幸に日本と朝鮮の媾和談判も運びまして、それから間もなく朝鮮政府から日本へ謝罪使を送つて参つたのであります。

所が此の謝罪使を送ることに付きましては、朝鮮政府内にありましては中々に其の候補者が多うございまして、其の人選などの事に付ては朝鮮政府内で非常に纏れがあつて、誰をやるかといふことが中々決定しない。そこで斯く當該政府の官吏が謝罪使の人選を爲し得ない以上は、此の人選は之を國王にお頼みする外に途はないといふことで、遂に國王が獨裁でお決めになることになりましたが、其の際朝鮮の國王は金玉均君を御選びになりました。其の時國王殿下に於かれては、正使を朴泳孝君、副使を金晩植君、従事官を徐光範君とそれ／＼御決めになり、金玉均君に表面は日本視察と稱して、其の實謝罪使の監督を命ぜられたのであります。之を以てしましても金玉均君の國王殿下から受けて居つた信用の程が知られるのであります。

それで此の金玉均君が謝罪使の監督となつて日本に來ます前に、金玉均が國王に目についた時に、國王に奏上致した薄いものですが紫版に刷つた書物があります。それは興亞策と題して金玉均君の拵えた物でありますが、それを國王に奏上しました。要するに亞細亞を興すの策は他なし、朝鮮と、支那と、日本と此の三國が從來の行懸りを一切棄て、相互に和睦一致して、西洋の東の方に段々と押寄せて來る勢を防ぐより外はありませぬ、といふ風なことが之には書かれてある。さうして先程も申し上げましたやうに、金玉均君はそれ迄自分の號を古筠と申して居りましたが、其の時に此の古筠といふ號を改めて金三和と稱した、此の三和といふ號を付けたのは即ち此の時の事であります。斯様にして福澤先生から三和の説を聴き、それを自分の意見として國王殿下に申上げ、遂には自分の號ともした位で、頻りに金玉均君は此の三和といふことに惚れ込んで、東洋の平和は三和に依るの外なしといふことを熱心に論じたのであります。

そこで只今も申上げます如く、朴泳孝君が正使、金晩植君が副使、徐光範君が従事官としてそれ〴〵謝罪使が日本に参り、懸て謝罪使の任務も済みまして、それ等の人達が將に歸らうとした時に、井上外務卿の斡旋で、横濱の正金銀行から金十七萬圓を金玉均に貸したのであります。尤も正金銀行には澁澤先生門下の出身たる小泉信吉君も居りました。要するに是は井上外務卿が金君を信用した結果に外ならぬのであります。そこで金君は僅かなものでありますから謝罪使一行の費用を拂ひまして、其の残りの分を悉く朝鮮の改革、朝鮮を文明開化に導く費用に充てたのであります。そして金君は直ぐに福澤先生の所に行きまして、朝鮮を改革して文明開化に導くにはどうしたら宜しいかといふことの相談を致しました。其の時は福澤先生を中心に謝罪使等が皆取巻いて、彼此れ一週間も掛つて相談したのであります。其の際福澤先生の決められた條件といふものは、第一に、朝鮮の中央、地方を問はず全國から有爲の青年を選び出して之を東京に留學させること、第二には、京城に於て新聞を發行するこ

と——御承知の通り、其の當時朝鮮にはまだ新聞といふものが發行されて居なかつたのであります——それから第三には、京城に於て軍隊を訓練すること、この三箇條を福澤先生は金玉均君等一行の謝罪使に示しました所が、謝罪使等は直ちにそれに同意しまして、其の通り方針を決めたのであります。

そこで金玉均等は取敢へず朝鮮から若い者を選んで、澤山日本に送りました。そしてそれ等の若い者は、士官學校と慶應義塾にそれ／＼入學したのであります。それから又新聞の機械を註文し、新聞記者としては牛場卓造、高橋正信といふ二人の者が雇はれて参りました。又軍隊の訓練に付きましては松尾三代太郎といふ人と、原田一といふ人と——一人は騎兵大尉で、今一人は歩兵中尉位の人であつたのであります。此の二人が加はりました。さうして恰度其の年、明治十五年の十二月二十八日に發つて行き、又日本の方からは竹添といふ人が公使になつて赴任しましたが、其の時に金玉均君竝に謝罪使等も皆歸つて行きました。

私は此の時福澤先生の家に入りまして、慶應義塾をやつと卒業致しました頃であります。そして其の當時後藤象二郎さんは海外視察の爲に、外國に出られて居りましてお留守でありました。即ちお留守の間の出來事であつて、後藤象二郎さんの夫人が、「角さんも——夫人は私の事を當時角さん／＼と申して居りました——朝鮮へ行けるのですか」と言はれる。「いや、別に福澤先生からは何も聽いて居りませぬが……」と答へた所が、後藤さんの夫人が福澤先生の所に行つて、「私が旅費を出すから、角さんも朝鮮へやつて下さい」といふ風に頼みますと、福澤先生も「私もそれでは旅費を半分出させよう」と言はれて、そこで兩方から旅費を半分々々出して貰つて、井上は朝鮮見學といふことで、他の人と同行させやうといふことで、私はそれで以て他の諸君と共に朝鮮に行くことになつたのであります。勿論私は當時學校を出たばかりで、世間の事などに付ては一向何等の經驗など有つて居りませんでした。幸以後藤象二郎さんの夫人と福澤先生とが仲に入つて下さつて、私も愈々朝鮮へ行くことになつたの

であります。

斯く致しまして、私が愈々朝鮮へ向けて發つ時分に、福澤先生は私に向つて、懇々と色々なことを説いて御話になつたのであります。朝鮮へ行つたら食物に氣を付けろとか、或は餘り酒を飲んではいかんどとか、色々御注意旁々御話になつたのであります。私が茲に特に申上げて置きたいと思ひますのは、先刻私が福澤先生の誕生百年に就て、其の誕生を記念する爲に書きました本を持つて來て居りましたが、それにも書いて居りますやうに、福澤先生は色々な事を私に話されたのであります。其の福澤先生の言はれました言葉に、吾々の東洋の天地に於ける抱負は、後藤先生と數年來話合つて居つた節々を聞いて居つたであらうから、それでもう解つて居るであらうが吾々は逆も太平洋中の此の孤島に蟄居して居ることは出來ない、大陸に足を掛けねばならぬ。それには固より他國の領土を横領するとかいふやうな意味は持たぬけれども、人民の生活を安定し、人民の教育を普及して、據つて以て東洋の天地を一の勢力の下

に一致して其の平和を得ねばならぬ。斯様にして西力東漸の勢を防ぐのが吾々の抱負である。深く此の事を心に銘して忘れないやうにして貰ひたい。朝鮮が其の手始めである。其の他の事は時に應じて申し送るけれども、支那には全國人民に普及するやうな、日本の「いろは」に似たやうな文字がない、是は大變に殘念であるが朝鮮には幸に諺文がある、是で我國の片假名交じりのやうなものを作つて速かに使つて貰ひたい。それからお前向ふに行つたら、何とかして國內を巡回して、人情とか、風俗とか、山河の形勢、土地の肥沃の有様などを觀察して、それから又地方の區劃はどうなつて居るか、行政の組織はどんな風になつて居るか、租税の徴收の仕方はどうか、若し調査が出來るならばさういふ事を調べて貰ひたいものである。是がお前の朝鮮へ行くに付ての一方の仕事である。斯ういふ風に福澤先生から言はれたのであります。

斯して私は一行と共に朝鮮に參りました。參りました所が、私共の一行と相前後し

て謝罪使が朝鮮に歸りますと、朝鮮の國王も大變金玉均を信用せられ、又従つて朴泳孝、金晩植、徐光範も政府から信用せられたのであります。そして朴君は漢城判尹を命ぜられ、新聞創刊、軍隊訓練の準備に著手し、金君は更に外衙門の協辨に任ぜられて外交の事務に當り、一時は兩君共に相當の勢力を得たのでありますけれども、間もなく支那の兵營、又事大黨より排斥を受けましたので、朴君は退いて廣州留守に止まり金玉均は密かに日本に逃げて來たのであります。其の時に私と同行しました牛場、松尾、高橋、原田といふ人達は、もう是ぢやどうも朝鮮に居ても見込は無いから歸ると言ひ出した。そこで私は「さう歸ると言つた所で、今來たばかりで見込が無いから歸るといふのは餘りひどいぢやないか」と言つて反對しましたけれども、併しどうしても歸ると言ふ、お前一人残れと云つて——私は其の時が恰度二十三歳の學校を出たばかりの青年でありますから、何も他の事は考へない、恐ろしいとか、危いかいふやうな念慮のある者ではありませぬでしたから、それぢや俺一人残ると云つて、皆に別

れて私一人残つたのであります。此の時に新聞の活版職工の植字係長として日本人の眞田といふ者と、それから新聞機械の修繕若くは活字の不足を鑄造する爲に三輪といふ者を連れて行つて居りましたが、此の二人が「井上さんのやうな若い人一人残して置いて、年寄つた人が皆歸るなんといふことは酷い、吾々こそ此の時に踏止まつて、生きて居らうが殺されやうが福澤先生に喜んで貰はう」といふので以て、此の二人と私と三人が京城に踏止まつたのであります。

それから私は此の儘々では仕方がないと思ひまして、頻りに奔走を致しまして、色勢力のある人や、それから其の他事大黨でもない、鎖國黨でもない人達と交際を始め、種々の危険をも忍んで頻りと奔走して居ります中に、遂に宮中にも出入するの機會が得られました、其の上に私が福澤先生の弟子であるといふ肩書の爲に大變に持て又信用も得られました結果、外衙門の顧問として備ひ入れられたのであります。それから次いで金晩植君が漢城判尹となり、其の下に博文局を置きまして、私は其の主宰

といふ名義で囑託となり、そして漢文のみの新聞を創刊することになつて、其の準備に掛かつたのであります。それから私は此の新聞を發行するに付て、日本人としては私一人ですから、兩班と稱する階級の若い者を選抜して、其の者に主事又は司事といふ官名を授けて、之を記者に使つて、私は其の記者の監督をして愈々漢城旬報といふ新聞を發行することになつたのであります。其の中に段々と王宮に近付くことが出来まして、御承知の通りに、只今でも諸君御覽になるでせうが、朝鮮には舉丸の無い男子が澤山ありまして——宦官と申して居ります——其の宦官に知人が出来て國王にも時々お目に掛かることが出来たのであります。それから私は表面上は外衙門の顧問といふことになりましたが、恰度此の頃朝鮮の政府に於て三大顧問と稱して居りましたのは、獨逸のモレードルフと、支那の王邕明と、それから日本の井上角五郎といふことになりました、不思議に若い人物が出来たのであります。斯して外衙門の顧問を兼ね、博文局の主宰を囑託せられ、漢城旬報といふものを發行することになつたのであ

りますが、是が恰度牛場君や松尾君が、見込が無いから歸ると言つて歸りましてから六箇月目の事でありました。斯様にして兎に角他の人々は皆歸りましたけれども私が一人居残つて、福澤先生の弟子が新聞を始めて居るといふだけの名義は維持した譯であります。

斯様にして漢城旬報を發行して居ります中に——此の漢城旬報といふのは御承知かも知れませぬが、實は官報でありまして朝鮮の國內の事を書き、又政府からの命令を戴せ、併せて海外近時といふ表題で外國の有様も書いて居りました。其の外國の有様を書くのに、どうも日本最良であるとか、支那に反對であるとかで、支那人から時々襲はれて大分危ふい目に遭つたのであります。所が或る一日偶然の事で支那の兵隊が物を買つて代を拂はないといふことがありまして、それが評判になつて、城内で支那兵は物を買つて代を拂はないことに付て、私は漢城旬報の第十號の紙上に於きまして華兵横暴といふ題で以て大いに支那兵の横暴を論じたのであります。そこで支那の兵

營からは非常に反對をされるし、朝鮮の政府では皆あんな事を書いてと云つて、びくびくして居る所へ李鴻章から使ひが來まして、元來漢城旬報といふものは官報ぢやないか、官報に支那兵の悪口を書立てるといふことは宜しくないではないかといふ抗議である。そこで私は、それは私の仕業である、朝鮮の政府が悪いのでもなく、又朝鮮の人民も悪くはないのである、皆私の仕業であるといふので、據んどころなく漢城旬報を辭職して日本に歸つて來たのでありますが、それは恰度明治十七年の五月の事でありませう。

○

偕て此の明治十七年の五月に日本に歸つて來ますと、恰度後藤象二郎さんも海外視察から歸つて居られました。そして金玉均もまだ滞在して居りましたので、そこで福澤先生、後藤さん、金玉均君、是等の人々と日々集つて色々な話をして居りました。其の中に井上外務卿から私に一寸來て呉れといふことでありました。そして井上外務

卿に會ひました所が、其の時井上外務卿から、どうか急いで朝鮮にもう一度行つて呉れないかといふことを頼まれました。そこで私は早速福澤先生や後藤さんなどと相談しまして、其の人達の同意を得て朝鮮へ参りましたのが恰度明治十七年の八月の事でありました。所が私が此の十七年の八月に東京を發たうとする時に號外が出まして、佛國が支那と戦端を開いて、福州馬尾の砲臺を攻撃した、それが爲に福州馬尾の砲臺は陥落したといふことでありました。それで私が急いで朝鮮に發つて行つた理由は何であつたかといふことは、大概諸君の御想像がお付きのことと思ふのであります。さうして私が京城に發つて行くと同時に、恰度歸省して居られました竹添公使も發つて行きました。金玉均も朝鮮に歸りました。又朝鮮から日本の士官學校や慶應義塾に留學して居りました生徒も、悉く同時にあちらに歸つて行つたのであります。

所で京城に行つて見ますと、是まで居つた支那兵の數が半分位に減つて居りましたが、それに付て支那は佛蘭西と戦さをするのに逆も朝鮮など守つて居れない、それ

だからこんな支那兵の数が減つたのだといふ評判が立つて居りました。それから日本から續々と皆やつて来るのは、今に日本が朝鮮を攻める爲であらうなどいふ評判も非常に盛んに行はれて居りました。御承知の通り朝鮮人といふものは事大主義と申しますが、如何にも事大主義で、支那に頼る、支那に頼らなければ亞米利加の公使館に行く、或は露西亞の公使館に行くといふ風な工合に、何處かの國に頼ることのみを考へて居る。私の行つた當時には總ての朝鮮政府の高い地位の役人は米國黨とか、或は露西亞黨とかいふやうな譯で、隨て又日本黨といふやうなものも出來まして、金玉均、朴泳孝、徐光範、洪英植といふやうな者は、日本公使館に行きますと案内無しに入つて行つても叱られもしないといふ程でありました。當時朝鮮政府では晝は晝寢をして居るか何かは知りませぬが、遊んで居りまして、夜王様の所へ出て行くのが習慣になつて居りましたが、皆各國の公使館や領事館に出入りして、其處で聞いた事を好い加減に拵え上げて王様に申上げる、そして王様はそれをお聴きになるのを樂みにな

さるといふやうなことになつて、之を稱して別入侍と申しますが——別入侍といふのは此の頃に始まつた言葉だと思ひます——それで私の所に宦官が出て來て、斯ういふ事を亞米利加の公使館で聞いた、あゝいふ事を露西亞の公使館で聞いたが、それは本當か嘘かといふやうなことの聞合せが絶えずやつて來るのであります。それから又私にも宮中に出て來いといふので、他の人間と同じやうに夜宮中に出て行つたことも其の頃度々でありました。そして是が段々と進んで來て、遂にあの有名な金玉均の内亂が起つたのであります。

其の頃洪英植に仕事がなかつたのを、王様が郵政局を拵えるからといふので、洪英植を郵政局の總裁に命じたのであります。そこで政府の役人達が外國の公使、領事などを開業式の祝と稱して十二月の四日に郵政局内に招きましたが、是が抑々内亂の始まりでありまして、即ち皆の者を郵政局に招いて置いて——郵政局の隣に藁屋が三四軒ありましたが、それにダイナマイトを仕掛けて置いて之を爆發させようとしたので

あります。其のダイナマイトの仕掛には福島春秀といふ者を連れて其の仕掛けに出掛けた譯であります。所が其の十二月の四日の夜もそく十時頃になつて、私の居住して居りました所へ人がやつて來まして「どうしたのだ、まだダイナマイトの爆發の音がしないではないか」と言ふ。「イヤ、實はダイナマイトは仕掛けてあるのですが、幾ら火を付けても爆發しないのです」そんな馬鹿な事があるか、ダイナマイトが爆發しなければ、あの家に皆火を付けてやれ」と言ふ。そこで今度は使ひの者が行つて、其の空家に火を付けて三四軒焼いてしまひました。そこで是が焼け出しましたので宴會に來て居る客が皆驚いて逃げて出て來る所を暗殺に行きましたのが宗島和作といふ男でありました。又其の中には中村四郎兵衛といふ警察官も居りましたし、其の他金太郎といふ車夫の強い奴も居りましたが、中でも宗島が自分の手柄にしたいが爲に前に出て行つて閔泳翊を斬付けました。所が閔泳翊は死にませぬ。そして、閔泳翊がわいわいと言つて逃げ込んだものでありますから、もう他の客は宴會の場所から出ようと

も致しませんでした。

そこで當時其の宴會の場所には郵政局に備はれて行つた日本人の官吏が居つたのであります。其の人は事情を知らないものでありますから、ピストルを取出してお客の保護に當りました。さうすると暗殺者も今度は其のピストルに恐れて何にも働きをしない。そこで金玉均、朴泳孝は是では相成らぬといふので飛んで參りまして、遂に王宮に馳付けて行つて、王様のお寢間へ行つてどうも支那兵が騒動を起して斯様な有様になりましたから、早く御立退き願ひたいと云つて立退を奏上したのであります。それから聽て御立退きになることになりましたが、恰度王様が王宮を御出になる時分にダイナマイトが爆發しまして敦義門といふ門を爆破致しました。是は洵に工合良く壞れて、私等の住つて居ります家の障子の硝子戸ががた／＼震へる程でありました。それから恰度李載先といふ人の家へ王様が御著きになる頃に、竹添公使が日本兵を率ひて王様を護衛して居りました。さうして其の護衛の中を王様が御出ましになりました

てそれから誰々来い／＼と言つて御召しになる、そこで皆が行く、門を潜つて日本兵の圍んで居る中に入りますと、日本に留學に来て居た書生等が刀を持つて居つて片ツ端から斬殺してしまつたといふ、それが即ち金玉均、朴泳孝の亂の最初でありました。其の翌日は幸に政權も取れ、又兵權も手に入つて、洪英植君は左議政となり、金、朴の兩君は承旨となり、兵權も亦手に入れて、遂に改革の政見を發表したのでありますが、其の政見には人材を用ひるには門地は問はない、貴民は同等にして課税賦課は均一なるべしと宣言して居つたのであります。さうして其の晩には遂に王様を王宮に御還し致しましたが、其の時もやはり日本の公使が護衛して參つたのであります。

此の時の事を申しますと、非常に残念な話でありますが、御承知の通り朝鮮では其の當時、兵隊の月給を二月も三月も拂はないといふことは珍しくなかつたのであります。それで其の時も實は拂つて居なかつたものでありますから、兵隊達は朴泳孝、徐光範に向つてどうか月給を拂つて下さいと言ふ、其の時金玉均君は竹添公使が金を用

意して呉れて居ると思つたのでせう、私は金を用意して居るぞといふことを、暗々裡に竹添さんから言はれたのも承知して居ります。所が竹添さんの手許には金が無かつた。そこで朝鮮の兵隊が給料の支拂ひを要求するのに、朴泳孝も、徐光範も拂ふことが出来ない。そこで此の朝鮮の兵隊の或る一部の者が、支那の兵營に馳込んで行つて裏切をして、支那兵を案内して王宮に攻込んだのであります。それで王宮内では一回は日本兵と支那兵とが戦ひましたが、二回目には日本兵は退いて、王宮は占領せられて王様も生捕られました。同時に洪英植は其處で殺され、又日本公使も、日本兵も金玉均、朴泳孝も逃げて、其の翌朝京城から仁川まで遁れまして、それから私は朴泳孝と金玉均を連れて日本へ歸つて來たのであります。是が恰度明治十七年の十二月七日の事でありまして、是で金玉均の騒動といふものも終局を遂げた譯であります。

○
斯様に致しまして金玉均は日本に亡命して、日本に於ては岩田周作と申して居りま

したが、どうしても井上馨さんが憎くてならない。人を煽動して戦争をさして置いて相當の理由があつて敗けたのに、敗けて來たからと云つて、自分は晝寢をして居ながら會ひに行くと居留守を使つて會つて呉れない、實に怪しからぬといふことで、金玉均は頻りに井上外務卿の悪口を叩いたのであります。そして人に會ふ毎に之を吹聴したものであります。それが爲に小笠原島にも流され、北海道にも送られして、十年間といふものを斯くして暮したのであります。其の十年間を過した時が恰度明治二十七年、彼が上海に赴いた時であります。

此の金玉均君が上海に行きますことに付ては、今日までも書いた物が色々残つて居りますが、何故金玉均が上海に行くことを決心したのか誰にも金君は話さない。私共にも極く祕密にして話しませんでした。所が或る晩おそく私の所に参りまして「今日は死別れに参りました、井上さん、死別れといふのはどういふことか、事情は福澤先生に詳しく申上げましたが、實は三和の主義を以て李鴻章を説かうと思ふ、私が支那に

行つて李鴻章に面會が出来れば——或は面會する前に殺されるかも知れない、或は其の前に死ぬるかも知れない、或は又面會中に殺されるかも知れない、勿論面會後には生きては居ないだらうと思つて居りますが、兎に角日本、支那、朝鮮の三國が共同一致して西洋の勢を防ぐのが目下の急務で、東洋平和の原因は茲にあるのだといふことを李鴻章に向つて説かうと思ふ」と。「それでは其の事を福澤先生に話したのか」と申しますと「福澤先生はお前は到頭支那へ行つて死ぬのかと仰しやいました、死ぬのは私は覺悟の前であります、今日は唯死別に來ました」斯ういふものでありますから「それでは福澤先生もさう言はれた以上は留めても仕方がない、死に、行く前に後藤さんに會つて行つたらどうか」斯う申して別れましたのであります。さうして恰度其の翌日發つて神戸に行き、それから何の爲か大阪に少し滞在してから、神戸を發つて上海に行つたのであります。

所が金玉均の連れて居りました朝鮮人の中に、どうも怪しい者があるからといふこ

とが政府の方でも氣が付き、又友人の方でも氣が付きましたので、金玉均の上海行を差止めたらどうですかといふことで福澤先生の所へ言つて來るのを、先生は電信で上海の郵船會社の支店や領事館に宛て、注意をなされたが、其の中に上海に上陸しまして、岩田三和四十年と自分で宿帳に書いた日の夜、遂に志を果さずして殺されてしまつたのでありますが、最初福澤先生に會つた時に三和の必要を論じ、其の後三和の文字を自分の號となし、最後に遂に宿帳に自分自ら岩田三和四十年と書いたといふことを、私共當時の友達として考へると洵に氣の毒でならない、私は暫く此の事は口外せずに居りました。だがどうもそれが氣の毒でならない。彼は中々の豪傑であつた、一旦思ひ込んだ事は之を貫徹する爲に、尊い生命まで斷つたといふだけの想像が私共には付くのであります。福澤先生も其の當時「嗚呼、到頭死んでしまつたか、自分にも弟子は澤山あるが、あれ程信用して呉れる弟子は餘計ない」と言つて嘆息せられたのであります。

それから金玉均君の死骸が朝鮮政府に引渡され、朝鮮政府では之を八道に引摺廻して曝物にしたといふことが新聞で分りました時に、甲斐軍治といふ者に頼んで「お前行つて金玉均の死骸を探して、頭の髪でも宜い、着物の端でも宜い、若し出来れば腦漿でも一つ切取つて來て呉れ」と、斯ういふことで甲斐軍治が朝鮮に参りまして、朝鮮の麻浦といふ所に曝物になつて居る時に、極く少量ではありますが腦漿を切取つて、それを瓶に入れて持つて歸りました。それから福澤先生はそれを暫く自分の家に祀つて居りましたが、遂にあの駒込の眞淨寺といふお寺に墓を建て、お祭りするやうになつたのが、先日眞淨寺で法要を開いた原因であります。

今日は金玉均君の死後四十幾年といふ歳月が経ちました。今日同君が生きて居りますれば慥か今年八十二か三にも達して居るでありませうが、此の金玉均の遺兒といふのが居るといふことを先日聞きました、それぢや一つ會つて見やうといふので會ひま

したが、鈴木さだと言つて、鈴木某の妻になつて居る者が金君の遺兒だといふのであります。此の人以外には今日金玉均の血統の者は生きて居りませぬ。生きて居るのは唯此の人一人だけであるといふので會つて見ましたが、當人は豊橋で長唄の師匠をして居りました。而も長唄の師匠をして居ります上に、大變琵琶歌が上手であるといふことを聞きまして、其の遺兒である鈴木さだなる者に話しました所が、自分は親の生前の事を知つた人に琵琶歌で以て聽いて貰ひたいといふことでありましたので、私は同女の爲に琵琶歌を作つてやりました。琵琶歌の家元は薩摩と申しまして、私の作つた琵琶歌はそれで宜しいといふことになりまして、それから交詢社で琵琶歌の會を開きました時に其の鈴木さだがやつて來まして、其の琵琶歌を歌ひました。そんな縁故で三和といふことに付て初めて人に語り出した譯であります。是は全く昔の祕密の話であります。今日では何ももう遠慮がありませんから申上げたやうな譯であります。

○

本日は先づ大體是だけの事を皆さんの前に申上げて話を終ることゝ致します。若し皆さんから、當時あの事はどうであつたか、どういふ風であれがあつたのかといふやうな事柄に付て御尋ねでもございますれば御答へ申上げたいと存じます。尤も私も今日もう彼此れ八十近くにもなりましたし、體も弱くなりましたし、記憶の方も大分薄くなつて居りますので、或は皆さんの御参考になるやうなことが申上げられるかどうか分りませぬが、記憶にありますことだけは御返事申上げることが出来やうかと存じます。それでは今日は是で終ることに致します。(拍手)

373
117

昭和十二年五月七日印刷
昭和十二年五月十日發行

(非賣品)

編輯兼發行人

東京市品川區北品川三ノ三一九
中島

司

印刷人

東京市豊町區有樂町二ノ七
吉岡清次

次

東京市丸ノ内仲通十二號館六號

發行所

中央朝鮮協會

(電話九ノ内一六三四番)

終

